上毛町議会委員長研修報告（熊本県山鹿市）

参加議員　（宮崎、荒牧、安元、三田、峯、岩花）

6月24日（月）、25日（火）の両日、上毛町議会委員長（議長、副議長、議会運営委員会、各常任委員会委員長、事務局、計8名）研修で熊本県山鹿市を訪れました。

山鹿市は、熊本県の北部に位置し、人口は1990年代から減少傾向を辿っています。出生数の減少による自然減、市外への転出者の増加による「転出超過」での社会減が要因であり、その流れは今後さらに加速度的に進行すると見込まれています。基幹産業の一つは農林業で中山間地域を抱え、高齢化による耕作放棄地の増加は、人口規模は違いますが上毛町に類似したところが多いです。今回、訪れた2施設及び帰りに立ち寄った朝倉市の復興状況について報告します。

中山間地域における企業誘致

熊本ワインファーム㈱菊鹿醸造所

総務産業建設常任委員長　**三田 敏和**

山鹿市が目指す地方創生の核となる「農林業の成長産業化」・「戦略的観光の推進」のもと、地域再生構想として新たな産業を作り出すのではなく、従来からの資源に光を当て、磨きをかけ新たなブランド創りに挑戦しています。

お聞きをすると、葡萄はありとあらゆる植物の中で、栽培している場所により、味などにはっきりと個性として表れるなど土地の影響を反映しやすい果樹のようです。山鹿市は収穫期の気温が、熊本市街地と比べると4～5°C低く、良質なお米の生産地でもあり、きれいで冷たい水が豊富であるということ、さらに年間2,000時間という恵まれた日照量と、18年間積上げてきた栽培技術を基に、味わい深い葡萄を収穫できるようになったようです。1999年に菊鹿町葡萄生産振興会を設立し契約栽培に取り組み、当初はわずか3軒だった生産者が、2018年現在には総勢30軒の契約数となり、栽培面積も当初の3倍の約9ヘクタールとなっています。

菊鹿醸造所は、2018年に新たに作られた施設でワイナリーを併設しています。人里近くの高台を整備して建てられたワイナリーからは一切家が見えず、周囲の緑に守られるようにワイナリーと自園が広がっています。雨量が多いこともあり、畑は日本のワイナリーでは初のスイッチ一つで開閉できるビニール屋根で覆われています。ワイナリーの半分はショップスペース、併設するレストランは近隣の食材を豊富に使用したランチが人気で、週末には待ち時間があるようです。

この視察で感じたこと

①従来の資源に磨きをかけ、６次化商品（ANA総研との連携）として中山間地域を観光拠点化
②新規葡萄生産者へ初期投資に係る支援、品質向上に向けた技術指導
③地元高校（鹿本農業高校など）との連携による人材育成
④官民共同（熊本ワイン㈱）による自己資金やファンドの活用、地域間連携
　（一大産地化目指すため隣接自治体との生産連携）

国指定重要文化財の指定管理及び観光化

八千代座

文教厚生常任委員長　**岩花 寛之**

視察研修2日目は1910年に地元有志の組合によって建てられた芝居小屋、八千代座の視察に行きました。八千代座は明治43年（1910）の開業以来様々な興行が行なわれ、山鹿地区に大きな賑わいをもたらしたが、昭和には映画館になり、テレビの普及により客足が減り閉館となり、人がいなくなった小屋は荒れ果て、屋根には穴が開き雨漏りする状況でした。

そんな朽ちかけていく八千代座に一番心を痛めたのは、華やかだった頃を知るお年寄りであり、老人会を中心に、「瓦一枚運動」という募金を募り、屋根瓦を修復。この運動に刺激を受けた若者も、復興へ向けての様々な活動を始めました。

その後、昭和63年国重要文化財に指定され、平成2年から市民の手づくりで行われた「坂東玉三郎舞踊公演」では、明治以来の芝居小屋が創り出す空間のなかで、華麗に舞う玉三郎の舞台のすばらしさに観客は魅せられ、この公演が復興への大きな追い風となり、八千代座の名前を全国に広めることになりました。平成8年より平成の大修復・復原が始まり平成13年完了。「瓦１枚運動」と銘打った彼らは30年を超える復興活動を実施。八千代座の国の重要文化財指定を受けて実施された「平成の大修理」を経て、平成13年から現代の芝居小屋として活き続けています。

今回の視察の目的は、そうした歴史建造物に対する①指定管理制度の運用方法②保存管理方法③住民や商用利活用の状況等の調査でした。

山鹿市教育委員会博物館長の井上氏と、指定管理者である山鹿市地域振興公社の館長には上記の３点について山鹿市の置かれた背景や直面する課題、八千代座の目指す未来像に至るまで、本当に余すことなくご教授頂きました。特に没落からの復興と再生のドラマを語る館長の言葉には、国や町からのトップダウンではなく、純粋に町を良くしたいという想いが伝わり、大変深い感銘を受けました。

上毛町にも中央公民館支館や数多くの遺跡、文化財がありますが、決して有効活用できているとは言えない状況であると思います。今回の視察による見聞を今後のまちづくりに活かしてまいりたいです。

九州北部豪雨災害復旧状況

福岡県朝倉市

予算決算常任委員長　**峯 新一**

視察の最後に、平成29年7月集中豪雨により、40名以上の死者、建物・農地など多くの被害が出た朝倉市の災害の復旧状況を視察しました。

日本最古の実働する朝倉三連水車は復旧し、周辺の平野部は、大量の土石流が流入した田畑以外は復旧できていました。支流の谷沿いに向かうと大量の流木処分は完了し、新しく移転した新築家屋が見られ、砂防ダムの建設がピークを迎えていました。しかしながら河川沿いは、道路と河川の境界すらわからない状態で、集落ごと流された家屋は未だに当時のままでした。

あれから2年、一刻も早い復旧を願うばかりです。